第3章　文法的結束性の定義

3.1　Halliday and Hasan (1976) の結束性

3.1.1　文法的結束性の概要

結束性とは、『外国語教育学大辞典』(1999) によると、「文に一貫性を持たせ、一連の文法的に独立した文を結びつけ、テクストにテクスト性を与える言語的な記号のこと」である。結束性という言葉は、Halliday and Hasan (1976) が提示した概念によって広がり、今日に至っても、結束性の研究の基盤はこの概念に依る部分が大きい。Halliday and Hasan (1976) によると、結束性という概念を形成している機能は、指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipsis)、接続 (conjunction)、語彙的結束 (lexical cohesion) の5つである。指示、代用、省略、接続の4つは文法的結束性 (grammatical cohesion) に関わる要素とされている。結束関係は、基本的には文と文との関係を意味するものであるため、結束性の観点をライティング研究に適用すると、文と文との間またはパラグラフまたはディスコースの単位の意味的または文法的な関係性を書き手がどう構築するかに焦点を当てることになる。本論文では、文法的結束性のこれら4つの要素に注目することとする。

3.1.2　接続

指示、代用、省略、接続の4つの要素のうち、まずは接続の機能を次の例から見てみる。

[3-1] I entered the room <u>and</u> everybody was waiting for me.

ここでは、and という接続語が文[2]で書き表された2つの事象を意味的につなげている。この and の機能と両文の意味により、この文全体が示す内容は、「書き手 (＝主語の I) が部屋に入ったところ、全員が待っていた (ことを知った)」という意味である。ここでは、書き手にとって、「部屋に入る前」に、「部屋で全員が待っていたこと」は前提となっていない。仮に次の 3-2 のように、この2つの事象について、陳述する順序を入れ換えてみると、同じ意味を構築することはできない。

[2] この「文」は厳密には「等位節」の意味である。もともと2文だったものが、等位接続詞 and によって接続されたことによって、それぞれ (等位) 節という呼び名に変わる。したがって、これらは厳密な意味においては文とは呼ばないが、もともと主語と動詞を持つ文であったと考え、表現の簡略化のため、節と文とを区別する必要がある場合を除いて、本論文では文と呼ぶこととする。

[3-2] Everybody was waiting for me and I entered the room.

この文では、3-1 とは異なり、「部屋に入る前から、部屋の中で全員が待っている」ことが前提となっている。したがって、3-1 と同じ内容を作りだすことはできない。このように、文と文を結合する機能を持つ and という接続詞を使うと、3-1 では「部屋に入る前」の前提がないという意味的な関係が生じ、3-2 ではその前提があるという意味関係が構築される。つまり、この接続詞は、文と文との間に意味的な結束関係を作る機能を果たすと言える。

次の 3-3 の例は、接続詞 and が接続するものが節に満たない単位のケースである。この場合、and は単に構造的に名詞を接続しているだけで、この名詞の間に、3-1 と 3-2 で見られたような意味的な結束関係は見られない。つまり、a CD and a DVD でも、a DVD and a CD でも、少なくとも読み手にとっては、構造上の順序の問題であって、そこに時間的な順序や書き手が意図する何らかの順序を読み取ることはできない。したがって、接続詞を用いた関係がすべて結束関係になるとは限らない。結束関係が成り立つ条件は原則として文と文（または節と節）との接続に限られる (Halliday and Hasan, 1976)。

[3-3] I bought a CD and a DVD at the music store.

3.1.3 指示

次に、結束性の別の観点である指示について概観する。Halliday and Hasan (1976) によると、指示が生み出す関係には、以下の例のように、逆行照応（anaphora）、順行照応（cataphora）、外界照応（exophora）の 3 つが存在する。

1) 逆行照応の例

[3-4] Mary didn't come to the party last night. She must have been busy.

2) 順行照応の例

[3-5] Before he came to work, John had breakfast at the café.

3) 外界照応の例

[3-6] Can I borrow that book?

逆行照応と順行照応では、先行するテクストまたは後続するテクストの中に照応すべき対象が

存在する。一方、外界照応では、テクスト内に照応対象が存在しない。ライティングを想定するなら、書き手と読み手の間で、テクスト外の意味関係からコミュニケーションが成立するような照応関係が外界照応である。したがって、外界照応は文と文との結束性の構築には貢献しない (Halliday and Hasan, 1976)。言い換えると、結束性は指示関係の連続性の中に存在するものであり、同じ事物や人物が談話の中でもう一度表出するということである。この意味において、指示機能を果たすものとして、人称詞や指示詞が挙げられる。指示詞には、定冠詞の the も含まれる。次の 3-7 の例では a long, low hall がもう一度 the hall という定冠詞 the を伴った形で出現している。したがって、文と文との間に結束関係が芽生える。

[3-7] She found herself in a long, low hall which was lit up by a row of lamps hanging from the roof. There were doors all round the hall, but they were all locked.

(Halliday and Hasan, 1976: 72)

the が結束関係を作り出すのは、この the hall の例のような場合のみである。次の 3-8、3-9、3-10 で見られる the は結束関係を作らない。3-8 では、the の限定機能は、後続する where we met each other for the first time によって担われている。このような順行照応的な限定においては、文と文との結束関係は成り立たない (Halliday and Hasan, 1976)。3-9 では、話し手と聞き手 (あるいは、書き手と読み手) の眼前に物理的に存在する限定的な事物について言及しているため the が使用されているが、これはテクスト内における要素間の結束ではない。テクストが生み出す意味内容が及ばない域の照応、つまり外界照応である。3-10 は、文と文との結束性を構築することには貢献しない the の使用法である。in the countryside や in the sea の the もこれに該当する。

[3-8] I remember the place where we met each other for the first time.

[3-9] Keep the change.

[3-10] The moon is shining brightly.

また、it、he/she、they などの三人称の人称詞は、談話の中で逆行照応として機能し、文と文との結束関係を生み出すことができるが、逆行照応の機能がない一人称または二人称の人称詞は結束的には働けない。これは、一人称と二人称の人称詞は談話の冒頭から使用することが可能であることからも明白である。つまり、一人称と二人称の人称詞が生み出す関係は外界照応的であ

ると解釈することができる。

指示詞や人称詞に加えて、指示表現として機能するものがある。例えば、(the) same、opposite、different、another/other などである。これらの表現により、先行する文の一要素と逆行照応的な関係を築くことができる。つまり、次の 3-11 の例のように、前で言及された事項を、復元することが可能であれば、そこに結束関係が生じる。

[3-11] My teacher told me to study harder, and my mother said the same thing.

3.1.4 代用

ここでは、代用を取り上げる。次の 3-12 の例では、one が computer を代用している。この代用関係が成立することによって、文と文との意味的あるいは文法的なつながりが生み出され、結束関係が築かれる。代用語の機能を果たすことができるのは、one(s)のほかに、so や do (did/does) などである。one は名詞の代用語として、do は動詞の代用語として、そして、so は節の代用としての役割を果たす。

[3-12] This computer is not working anymore. I must get a new one.

3.1.5 省略

文法的結束性の 4 つの要素の最後は省略である。次の 2 例のように、先行する語や語句などを再度後続の文で使用する場合に、それを省略することが可能な場合、文と文の間に結束関係が生まれる。

[3-13] I tried to memorize ten English words last night. I can only remember three [words] now.

[3-14] I've eaten five pieces of pizza, and I want more [pieces].

3.1.6 結束性を構築する語の分類例

Halliday and Hasan (1976) が提案する文法的結束性に関わる 4 つの要素に対して、具体的な表現を 1 つ取り上げ分類してみる。ここでは、then を例にとる。まず、4 つの要素の中で、結束性を作る then の機能は、次の例のとおり、1) 指示と 2) 接続の 2 つに分類できる (Halliday and

Hasan, 1976)。3-16、3-17、3-18 はいずれも接続の機能を果たしているが、さらに詳細にその機能を分析すると、3-16 は時間的機能、3-17 は因果・条件的機能、3-18 は付加・並列的機能をそれぞれ果たしている。このように、1 つの語を例にとっても、結束的に機能する手法が複数存在するものもある。したがって、学習者のライティングにおける接続表現の使用についての研究を行う場合は、ある特定の語がどのくらい出現するのかの頻度を調査するだけではなく、それがどのような機能を果たしているかも検証する必要がある。

1) 指示機能としての then の例

[3-15] In my young days we took these things more seriously. We had different ideas <u>then</u>.

(Halliday and Hasan, 1976: 75)

2) 接続機能としての then の例

[3-16] For the whole day he climbed up the steep mountainside, almost without stopping. And in all this time he met no one. Yet he was hardly aware of being tired. So by night time the valley was far below him. <u>Then</u>, as dusk fell, he sat down to rest.

(Halliday and Hasan, 1976: 238-239)

[3-17] Why don't you hire a car? <u>Then</u> you'll be able to visit more of the area.

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary 7th ed.*)

[3-18] She's been very busy at work and <u>then</u> there was all that trouble with her son.

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary 7th ed.*)

3.2 接続表現

3.2.1 接続表現の下位分類

Halliday and Hasan (1976) の提示した文法的結束性に関わる 4 つの要素のうち、その下位項目の枠組みや具体的表現の分類などについて、もっとも多様な提案がされているのが接続である。Halliday and Hasan (1976) は接続に関わる表現の分類として、「付加 (additive)」、「反意 (adversative)」、「因果 (causal)」、「時間 (temporal)」の 4 つの基準を提案している。さらに、この 4 つの下位項目として、付加 (単純付加、複合付加、比較、同格)、反意 (反意、対比、修

正、却下)、因果(一般的、特定的、転倒した因果、条件、各個)、時間的(単純時間、複合時間、結論、連続および結論、時間、時間:相関形式、「今この場で」、要約)を提示している(安藤他、1997)。また、Quirk et al. (1985) は、接続表現を8つの下位項目に分けており、それらは、listing、summative、appositive、resultive、inferential、contrastive、transitional、corraborative である。さらに、Celce-Murcia et al. (1999) は Halliday and Hasan (1976) の分類を簡略化し、以下の下位項目を設定している。

・Additive – emphatic, appositional, comparative
・Adversative – proper adversative, contrastive, correction, dismissal
・Causal – general causal, causal conditional
・Sequential – sequential

また、Narita and Sugiura (2006) は彼らの研究にとっての実用的な下位項目数として、接続の種類を「列挙・追加」、「同格・並列」、「結果・推論」、「対比・譲歩」の 4 つに分類している。この分類の基盤となったのが、上述した Quirk et al. (1985) や Biber et al. (1999) であった。

このような接続表現の下位分類は、その分類を利用する用途や目的に応じて選択あるいは新たに提示することが必要となる。接続表現を厳密にその意味や機能によって分類するのであれば、接続表現の下位項目は多数になるだろう。その場合は、1 つの表現が複数の分類に属することもありえる。また、英語母語話者や学習者が作りだす談話の中で、どのように接続表現が使われているかを検証するのであれば、分類の数はそれほど多くない方が適しているかもしれない。分類数が多いと結局は個別の表現ごとに分析していることと同じことになるからである。さらに、学習者に接続表現を教授する際に意味分類ごとに提示するのであれば、学習段階に応じた分類方法が必要となる。いずれにせよ、任意の分類方法を目的に合わせて選ぶ必要がある。

3.2.2 接続表現の新たな分類方法(metadiscourse marker)

接続の機能を果たす表現は、discourse marker、discourse connective、cohesive device、semantic conjunct など、さまざまに呼ばれているが、これら談話標識に関連して、Hyland (2005) は metadiscourse marker の概念の重要性を指摘している。文(sentence)は、書き手が持つ命題的要素(propositional elements)と非命題的要素(non-propositional elements)から成り立っているが、この非命題的な要素を形成するものが metadiscourse marker である(Mauranen,

1993; Hyland, 2005)。Hyland and Tse (2004) は、metadiscourse marker を次の表 3.1 のとおり、読み手の理解を手助けするもの (Help to guide reader through the text) と、読み手を命題内容へ主体的に関わらせるために、書き手の意図や態度を明示するもの (Involve the reader in the argument) の 2 種類に分類している。

表 3.1　Hyland (2005) による metadiscourse marker の分類

Category	Function	Examples
Interactive resources: Help to guide reader through the text		
1) Transitions	express semantic relation between main clauses	in addition / but / thus / and
2) Frame markers	refer to discourse acts, sequences, or text stages	finally / to conclude / my purpose here is to
3) Endophoric markers	refer to information in other parts of the text	noted above / see Fig / in section 2
4) Evidentials	refer to source of information from other texts	according to X / (Y, 1990) / Z states
5) Code glosses	help readers grasp functions of ideational material	namely / e.g. / such as / in other words
Interactive resources: Involve the reader in the argument		
1) Hedges	withhold writer's full commitment to proposition	might / perhaps / possible / about
2) Boosters	emphasize force or writer's certainty in proposition	in fact / definitely / it is clear that
3) Attitude markers	express writer's attitude to proposition	unfortunately / I agree / surprisingly
4) Engagement markers	explicitly refer to or build relationship with reader	consider / note that / you can see that
5) Self-mentions	explicit reference to author(s)	I / we / my / our

表の中の、「読み手の理解を手助けするもの (Help to guide reader through the text)」の下位カテゴリー内に見られる 1) Transitions、2) Frame markers、5) Code glosses は、Halliday and Hasan (1976) を始めとする多くの先行研究の中で、文法的結束性に関わる項目として取り入れられていたが、特に「書き手の意図や態度を明示するもの (Involve the reader in the argument)」に分類された項目は、これまでの文法的結束性の議論の中では取り上げられることは少なかった (Hyland, 2005)。しかしながら、Hyland (2005) は、metadiscourse marker の機能に目を向けなければ、接続関係を分析する際に、その関係が外的関係なのか、あるいは内的関係なのかが区

別できないことになると述べている。内的関係とは、談話構成における言語上の関係であるのに対して、外的関係とは命題内における事象のつながりの関係を指す。例えば、次の 3-19 の finally は、談話構成上、書き手が意図した接続関係であるため、あくまで言語上の流れの中で使用されている。つまり、書き手の意向によって操作が可能であることから、「内的」と捉える。一方、3-20 の Finally は、実際の経験上の出来事として陳述されており、書き手の意向によって操作ができる範疇のものではないため「外的」なものとして捉える。言い換えると、命題的要素を言い表す関係が「外的」なものであり、非命題的要素を言い表す関係が「内的」なものであると言える。

[3-19] There are three reasons. For one thing, (中略) Moreover, (中略) And <u>finally</u>, ...

[3-20] He got lost in the mountain. (中略) <u>Finally</u>, he could get out of the forest.

Hyland (2005) は内的関係と外的関係の区別の重要性を説いているが、このことは、ライティングのパフォーマンス上の問題にも関わってくる。第二言語または外国語として英語を学習している学習者が、例えば first という接続表現を、3-20 の例のように命題的要素として使用できたからといって、3-19 のように非命題要素としても使用できるかどうかはわからない。したがって、first という語を 1 つ取り上げても、その使用傾向を検証するのであれば、外的と内的の両方の使用傾向から分析を進める必要があるだろう。つまり、内的あるいは外的な接続表現の使用を誘発するようなライティング課題を実施することで、metadiscourse marker の使用傾向がわかる。具体的には、上記の 3-19 や 3-20 の例でわかるとおり、文章タイプによって、内的関係を表す接続表現の使用頻度が変わってくる。3-19 は、意見文や描写文の課題の下で書かれたものであろうし、また、3-20 は物語文の課題であると想定される。Hyland (2005) が提案する metadiscourse marker の観点を含めて、学習者の接続表現の特徴を検証するのであれば、文章タイプが異なる複数のライティング課題を利用することが望ましいと言える。

3.3 文法的な結束関係が果たす役割

ここで、簡単に結束性が果たす役割について触れておく。Crismore et al. (1993) によると、接続表現や指示表現は書き手の考え、そしてそれが表されている文や節の間に結束関係を構築するのに重要な役割を果たす。結束表現が適切に使用されれば、テクストの意味内容の明確さや理

解しやすさを高めることができる（Flowerdew and Tauroza, 1995）。しかしながら、このような談話標識の数が増えると、人工的で機械的な文章になり、不自然になってしまうことがある（Zamel, 1983）。また、談話標識の数が増えるとテクストの理解を妨げることもある（Crewe, 1990）。どのように結束関係を構築して、どの程度の頻度で使うべきかについては母語話者でも難しい（Silva, 1993; Granger and Tyson, 1996）ため、ESL/EFL 学習者にとっては正しく適切に使うのはさらに難しい（Crewe, 1990）とされる。日本人英語学習者を考えた場合、ライティングの全体的な能力が発達すると談話標識の使用が増えていくのであろうか。あるいは、発達プロセス上のある段階に達すると、「人工的で機械的な文章」になることを懸念して、談話標識の多用を避けるようになるのだろうか。これらの疑問については、第 5 章で先行研究の分析をとおしてその解答を探るとともに、本研究での調査結果から考察を行うこととする。

また、結束性がテクストの意味理解を高めることに貢献する一方、結束性はあくまでもテクストの表層面のつながりを表しているだけであり、結束性が高いからといって、テクスト理解の本質である内容的一貫性あるいは統括性（coherence）に結びつくという保証はない（Carrell, 1982; Brown and Yule, 1983; Maxwell and Falick, 1992）という主張がある。その一方で、結束性と統括性の間には比例関係が存在する（Halliday and Hasan, 1985; McCulley, 1985; Fitzgerald and Spiegel, 1986）ことを示している研究もある。結束性と統括性はお互いに対の概念として、あるいは結束性が統括性の下位概念であると仮定して議論されることが多いが、両者の関係性の有無については、上記のように一様な結果が出ていない。その理由として、統括性の測定上の曖昧さが挙げられる。結束性は、Halliday and Hasan (1976) が提示しているように、接続や指示などのテクスト上の物理的な現象であるため、出現頻度などの客観的な指標を用いて結束関係の有無を明らかにすることは可能である。一方、統括性は、読み手にとってどの程度意味的なつながりがテクスト内に存在するかを示す、いわば主観的な指標であるため、あるテクストにおける統括性の程度を客観的に示すことが難しい。つまり、統括性は読み手の判断に委ねられる部分が大きい（Campbell, 1995）。例えば、次の文章における統括性を検証してみる。

The haystack was important. The cloth had ripped.（Clark and Haviland, 1977）

この 2 文の間に意味的な関係性を見い出すことは通常は困難であるが、「落下傘（パラシュート）」のことに精通している読み手であれば、この 2 文の間に意味的なつながりが読み取れる（Campbell, 1995）。つまり、特定の背景知識を持つ読み手にとってのみ、この 2 文に統括性が

存在することになる。このように、結束性と統括性は、それぞれの程度を表す指標が、前者は客観的であり、後者は主観的であるため、両者の関係性を検証するのは非常に難しいことであると言える。実際に、統括性を客観的な指標で測定しようと試みた研究(Hasan, 1984; Winter, 1994)では、その下位指標に結束表現の使用の有無の観点が含まれていることから、すでに両者に部分的な関係性が存在することが前提となってしまっている。この測定方法で、結束性と統括性の関係性を検証することは妥当ではない。そこで、本論文では、統括性を測定する手法を模索するのではなく、テクストの中で、接続や指示といった結束性を構築する表現手法が、読み手の意味解釈が損なわれないように適切に使われているかどうかを考慮しつつ、ライティング能力の違いによって、そのような表現手法の使用傾向が異なるかを検証することとする。言い換えると、コミュニカビリティが低い箇所で使われている表現は不適切な使用と判断した上で、適切に使用された表現のみを分析の対象とすることで、統括性が示すところの意味のつながりという観点も取り入れることができる。ライティングに取り組む上で、まずは結束性に注目することについて、橋内（1995）は、外国語として英語を学ぶ場合、特にライティングの初級学習者であれば、統括性よりも、まずは自らが書いているテクストにおける結束性をどう高めるかについて学び、指示語や接続語などを明示的に用いることによって文と文とのつながりのあるテクストを構築していくことが必要であるとしている。同様に、平林（2004）でも、日本人の高校生レベルであれば、まずは結束性を意識して書き進めることが必要であるとしている。日本人高校生を研究対象とした Miyasako (2000) では、どの参加者レベルでも高い統括性を持つ作文は見られなかったが、結束性の観点は参加者レベルを分類する要因になることが示されている。本論文でも日本人英語学習者を研究対象としているため、これらの研究同様に、結束性の観点からライティングを捉えていくことを目的とする。